

誕生日プレゼント

三戸 雅史

大人になつてからもらう誕生日のプレゼントは、どこか気恥ずかしいものがある。何ももらわれないほうが気が楽でもある。もらったしまつたときは、
「一応、お礼は言っておこうか」
と思つてしまふ。
しかし、お互いを知り尽くしている家族からは、逆に意表をつくプレゼントが贈られることもある。

その日、いつものように夜遅く仕事から帰ると、テーブルの上の緑色のビール袋が置いてあつた。空になつた弁当箱を母に渡しながら、ビール袋を遠くから眺めてみる。袋の上には書店の名前が印刷されていた。
「ああ、そうか。誕生日か」
母に言われるまで自分の誕生日のこと忘れていた。
冷蔵庫から缶ビールを取り出して、テーブルの上の袋を持ち上げて開いてみた。
「アンタが小さいころ、いつまでも離さなくてボロボロになつた絵本。今日、偶然本屋で見つけてね」
「ひとまねこざる」と書かれていた。
タイトルには記憶に響くものはない。

しかし、表紙に描かれた子ザルの横顔にな
んとなく見覚えがあった。立ったまま本を開
いた。これは、さるのじよーじです。どうぶつ
えんにござるでしめたが、とてもしりたが、
いした。どうぶつえんのそとが、どんなかで
しりたくてたまりませんでした。どんなか
という文章で始まっていました。ペー
た。覚えていた。覚えている。両手で皿を洗
皿を持ち、両手に持った二枚のタオルで拭い
ている。少し大きくなつてから、テレビのチャ
ルを足で変えてはよく両親から怒られていた
私は、たしかこの子ザルが憧れの存在だった
ような気がする。慎もつと鮮明に覚えていた
慎重に、手早くページを繰つた。記憶がよみが
きた。真ん中あたりで完璧に記憶がよみがえつ
きた。大きなビルの誰もいない真っ白な部屋。
それを模様替へのために持ち込まれたペンキ
や刷毛を使つて、子ザルがジャングルに変貌
させる様子が四ページに渡つて描かれていた。
前のページでは無造作に置かれていた脚立
やモップ、白いシートツなどがペー
つたとたん、赤い斑点のキリンに化けていた。

イスは黄色い豹に。シマウマの尻尾には「ペ
ンキ塗りたて」の札がぶら下げてあつた。壁
には緑鮮やかな椰子の木が描かれ、子ザルの
生まれ故郷が再現されている。基調とした無
機的な部屋なのだ。絵に立体感を持たせるた
めにつけてある影が、暗い雰囲気をかもし出
していたのだ。それらが大胆な発想の転換により、華麗な
変身を遂げていた。小さな私は、何度もページをめくり返して
は、「使用前・使用后」の絵を見比べたものだ
つた。見ているうちに自分でもイメージの世
界が広がっていった。そのうちこの動物た
ちが動き出すような気さえした。この動物た
ちが動きた家具や道具に生命を吹き込んだ子ザ
ルを尊敬した。ボロボロになるはずだ。

最後まで読み終えたとき、私はスーツのま
まネクタイも緩めずに正座をしていた。夕食か
まは、焼きたてのアジが香ばしい香りを鼻腔
に運んできた。ビールを一口飲んだ。子供のころには知ら
なかつた味が、口の中に広がった。早くその本が役立つといいいね。この本は、単に懐かしさだけで送られたブ

レゼントではない。
三十を過ぎても独身で、親元から通勤して
いる私への、母親からの暖かい督促状でもあ
ったのだ。
人差し指でこめかみをポリポリ掻きながら
「ありがとう」
とつぶやいた。
父と母から笑い声が飛んできた。

終わり